

## 次世代への住生活文化の継承と住教育に関する研究 中学生の住生活文化の知識と経験

A study on housing cultural succession and housing education:  
Junior high school students' knowledge and experience  
about traditional housing culture

鈴木 佐代

Sayo SUZUKI

家政教育研究ユニット

豊増 美喜

Miki TOYOMASU

福岡教育大学附属小倉中学校  
非常勤講師 / 大分大学客員研究員

田中 優希

Uki TANAKA

元福岡教育大学

古田 慧

Akira FURUTA

元福岡教育大学大学院

有友 里沙

Risa ARITOMO

元福岡教育大学大学院

(令和5年9月29日受付, 令和5年12月22日受理)

### 抄録

近年, 小学校, 中学校, 高等学校の学校教育では, 日本の伝統や文化に関する教育が重視され, 家庭科においても生活文化の理解や継承, 創造に関する学習活動の充実が求められている。しかし, 若い世代が伝統的な日本家屋や暮らしに直接触れる機会は少なくなっており, 住生活文化の理解・継承に向けた住教育の充実が課題となっている。本研究は, 次世代への住生活文化の継承と今後の住教育のあり方を検討することを目的とし, 本論文では中学生を対象に住生活文化の知識や経験の実態把握を行った。その結果, 同地域に居住する, 同世代の中学生であっても伝統的な住生活の経験や日本家屋の知識には差があること, 伝統的な住生活経験には, 自宅の和室形態や築年数といった物理的状況に加えて, 祖父母等の高齢親族との同居・交流状況が関係していることが明らかとなった。また, 伝統的な住生活の経験があるほど, 日本家屋に関する知識や, 伝統的な建物や歴史的なまち並みに対する興味関心, 継承意識があることも示された。

キーワード: 伝統文化 住教育 中学生 和室 生活経験 継承

### I. はじめに

近年, 日本の気候風土に根ざした伝統的な生活文化が失われつつある一方, 「和室」に代表される日本の住まいの文化が再評価されるようになってきた。国土交通省では, 平成25年から日本の地域の気候・風土・文化に根ざした住まいづくりや住まい方を含めた日本の住文化の良さの再発

見・普及に向けて「和の住まい」を推進する施策や活動を行っている<sup>1)</sup>。また, 令和2年には, 日本の木造建築を支えてきた「建造物修理」「茅葺」「建具製作」「畳製作」など17分野の伝統建築技術が「伝統建築工匠の技: 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」としてユネスコ無形文化遺産に登録された<sup>2)</sup>。

学校教育においても、グローバル化に対応して、日本の伝統や文化に関する教育が重視されるようになり、家庭科では生活文化の理解や継承、創造に関する学習活動の充実が求められている<sup>3~5)</sup>。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編には、「日本の伝統的な生活についても扱い、生活文化に気付くことができるよう配慮すること。」とあり、住生活分野に関しては、季節の音、ひさし、よしず、すだれ、打ち水、風鈴、和室の畳の清掃の仕方など生活の知恵の具体例が記載されている<sup>3)</sup>。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編には「日本の伝統的な生活についても扱い、生活文化を継承する大切さに気付くことができるよう配慮すること。」とあり、住生活分野に関しては「現代の住居には和式と洋式を組み合わせた住空間の使い方の工夫があることに気付くようにする。」や「我が国の伝統的な住宅や住まい方に見られる様々な知恵に気付く、生活文化を継承する大切さに気付くようにする。」などの記述がある<sup>4)</sup>。

このように発達段階に応じて住生活文化の学習活動の充実が求められているが、住宅やライフスタイルの変化とともに、都市部を中心に座敷や続き間、縁側、畳、障子や襖などの和の空間は減少傾向にあり、家庭の中で祖父母や親の世代から伝統的な暮らし方を学ぶ機会は減少している。若い世代は実体験が乏しく、住まいの伝統や文化を自分事として意識することが難しいと懸念される。

しかし、引き戸の建具による空間や環境の調整、床座の生活様式、日常生活の美意識などに表される日本の住まいの文化は、自然環境との親和性、環境負荷の低減、家族に合わせた柔軟な住まい方、地域の居住文化の継承など、持続可能な社会の実現に向けて、現在や将来の住まいや暮らしのありように重要な示唆を与えるものである。住生活文化について学ぶことは、現代生活の見直しや将来の持続可能な生活について考えることにつながり、現代を生きる子どもたちが住まいの伝統や文化を学ぶことの意義は大きいと言える。

本研究は、次世代への住生活文化の継承と住教育の充実を図ることを目的とし、本論文では、中学生への住生活文化の継承実態を、伝統的な住生活の経験と日本家屋に関する知識の程度から把握した。

住教育の充実を目的として、伝統的な住生活経験の実態把握を行った研究として、奥田・碓田らの研究<sup>6)</sup>がある。大阪府八尾市の小学生の保護者を対象にした調査より、伝統的な住生活は現在

より成人以前の実施度が高いこと、成人以前の経験度が高いと現在も実施していること、和室の続き間があると経験数が多いこと、祖父母など高齢者との接触や伝承機会の程度が高いほど住生活経験の実施度が高いこと等を明らかにしている。また、住生活文化の知識や理解の程度を調査した研究として妹尾<sup>7)</sup>の研究がある。香川県の中学生と大学生を対象に、伝統的住まい・建築に関する基本用語の理解について調査を行っている。中学生、大学生ともに名称や意味を十分に理解できておらず、より意識的な働きかけが必要であると述べている。また、正岡ら<sup>8)</sup>は、関東地方と近畿地方、中四国地方の大学生を対象に、住まいの伝統や文化に関するハード面の用語29項目とソフト面の用語17項目の認知度を調査し、現在の生活や住宅で目にすることが少なくなった用語の認知度が低く、これらを取り上げる必要があると述べている。

本研究は、上記の既往研究と同様に住生活文化の経験や知識等の実態把握を基に、今後の住教育のあり方を検討しようとするものである。これらの既往研究に対して本研究の特徴は、福岡県の中学生を対象に、住生活文化に関する知識と経験の実態を把握し、さらに住宅や家族状況など中学生を取り巻く環境や住生活文化に関する興味関心、継承意識などとの相互関係を考察している点にある。

## II. 調査概要

福岡県K市の中学校1校を対象にアンケート調査を行った（表1）。調査は2019年11月～12月に1年生と2年生を対象に実施した。受験や卒業を控えた3年生は調査の時間を確保することができなかつたため、翌年の2020年11月に新1年生を対象に調査を実施し、3学年分を調査した。調査は、共同研究者である家庭科教員が家庭科の授業の中で行った。有効回答数は344票である。

調査内容は、日本の伝統的な住生活の経験、日本家屋に関する知識、伝統的な建物やまち並みに

表1 調査概要

調査時期	調査対象	有効回答数 (有効回答率)	調査方法
2019年 11～12月	1年生 115人	115人(100.0%)	家庭科の 授業の中 で配布・ 回収
	2年生 111人	111人(100.0%)	
2020年11月	新1年生 120人	118人 (98.3%)	
-	合計 346人	344人 (99.4%)	

対する興味関心・継承意識、自宅の和室形態、築年数、祖父母等の高齢親族との同居・交流状況等である。なお、アンケート調査は、家庭科の授業で住生活分野の内容を学習する前に実施した。調査は無記名で行い、アンケートの結果は住教育の研究のために使用することを説明した。またアンケート結果の一部を、調査後に実施した「伝統的な住まい」の授業で使用している。

1年生、2年生、新1年生の回答に大きな差は見られなかったことから本論文では3学年を合算した結果を示している。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 日本の住生活文化に触れる機会：住宅と家族状況

日本の伝統家屋や昔ながらの暮らしに触れる機会がどの程度あるのか中学生を取り巻く環境を把握するため、自宅の和室形態と築年数、祖父母等の高齢親族との同居・交流状況を調査した。

##### (1) 和室形態と築年数

自宅の和室形態は、戸建住宅、集合住宅ともに「和室1室」が最も多く、約6割（戸建57.6%、集合65.0%）を占める（図1）。「和室なし」は戸建住宅の14.1%、集合住宅の23.1%を占め、集合住宅に多い。伝統的な住まいに見られる「続き間」や「複数と和室」は、戸建て住宅の場合でも各々8.4%、17.8%と少数であり、日常的に和室の構造や意匠、空間を体験できる環境にある生徒は限られていると推測される。

住宅の築年数は、中学生の回答であるため不明が多いが、不明87件を除く257件については、「10年未満」が105件（40.9%）、「10～19年」が87件（33.9%）、「20～29年」が20件（7.8%）、「30～99年」が42件（16.3%）、「100年以上」が3件（1.2%）となっている。築20年未満が

74.8%を占め、築30年以上は17.5%と少ない。住宅の築年数別に和室形態をみると、築30年未満の住宅では「和室1室」が6割以上を占め、主流となっているのに対し、築30年以上の住宅には「複数と和室」が比較的多く残っている（表2）。

##### (2) 祖父母との同居・交流状況

祖父母等の高齢親族との同居・交流状況については、「同居」（14.5%）は少なく、別居して「よく行き来する」（39.5%）や「時々行き来する」（36.3%）が多い（図2）。7割以上は高齢者と接

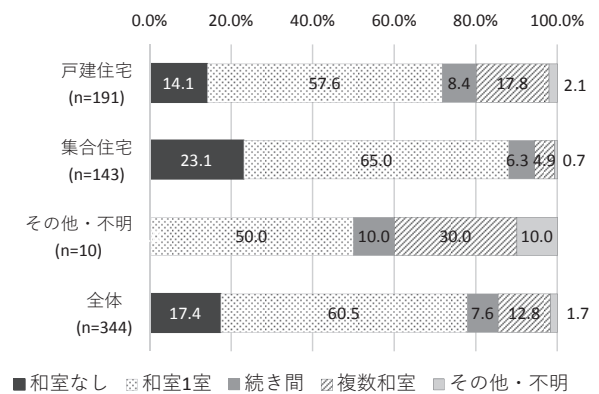


図1 和室形態

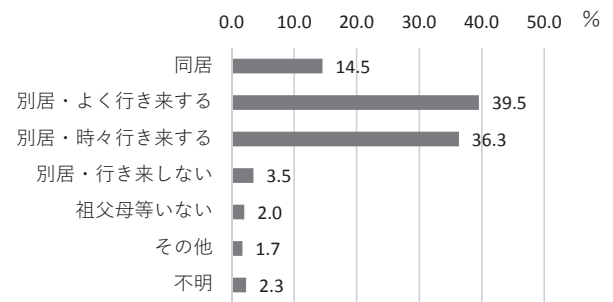


図2 祖父母等の高齢親族との同居・交流状況 (n = 344)

表2 住宅築年数別の和室形態

住宅築年数 (該当件数)	和室なし	和室1室	続き間	複数と和室	その他	不明	総計
10年未満(n=105)	26.7%	61.0%	6.7%	5.7%	0.0%	0.0%	100.0%
10～19年(n=87)	18.4%	67.8%	4.6%	6.9%	2.3%	0.0%	100.0%
20～29年(n=20)	25.0%	60.0%	5.0%	10.0%	0.0%	0.0%	100.0%
30～99年(n=42)	0.0%	47.6%	9.5%	40.5%	2.4%	0.0%	100.0%
100年以上(n=3)	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%	33.3%	100.0%
不明(n=87)	12.6%	60.9%	10.3%	13.8%	1.1%	1.1%	100.0%
総計(n=344)	17.4%	60.5%	7.6%	12.8%	1.2%	0.6%	100.0%

触する機会があるが生活を共にしている生徒は少ない。

2. 伝統的な住生活の経験

(1) 伝統的な住生活の経験

日本の伝統的な住まい方や維持管理方法を14項目選び、経験の有無を調査した(図3)。「畳に座る」「畳にねころがる」の経験率はほぼ100%であるが、「障子やふすまを外す」(55.8%)、「縁側にこしかける」(39.0%)など障子や襖、縁側に関する生活経験は畳に比べてかなり低い。これらの部位が現代の住宅からなくなっていることの表れであると推測される。また、「はたきでほこりを落とす」(39.2%)、「障子やふすまの張替えや破れの修理」(38.4%)、「ほうきで畳の部屋を掃除する」(24.7%)など住まいの維持管理に関する項目の経験率は全体的に低く、住まいの維持管理方法や道具の変化が読み取れる。



図3 伝統的な住生活の経験 (経験有の割合を示す, n = 344, 複数回答)

(2) 伝統的な住生活の経験と住宅、家族状況との関係

一人当たりの住生活経験数は0~14までばらつきが大きく、同地域に居住する同世代の中学生であっても生活経験の差は大きい。このような生活経験の差の要因を探るために、住生活経験の数により、生徒を3群に分け、自宅の和室形態、築年数、祖父母等の高齢親族との同居・交流状況との関係を分析した。3群の分類は、低位群(経験数0~5)が92人、中位群(経験数6~8)が120人、高位群(経験数9~14)が124人である(表3)。1年生よりも2年生の方が高位群の人数が多いのではないかと予想したが、低位群、中位群、高位群の割合に学年による違いは見られなかった。

まず和室形態と住生活経験との関係を見ると、高位群の割合が高いのは「続き間」(50.0%)と「複数和室」(52.4%)である(図4)。これに対して「和室なし」と「和室1室」は、高位群の割合が3割前後(各29.3%, 34.0%)となり、低位群の割合が3割を超える。複数の和室や続き間があるような住宅には、障子やふすま、縁側、庭なども附属していると考えられ、一方、近年増加している1室だけの和室には、畳以外に和室らしい造作がないと考えられる。このような和室の造りの

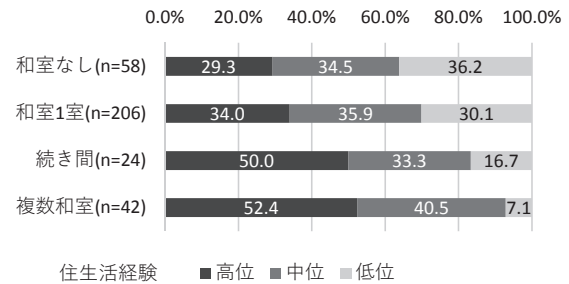


図4 和室形態と伝統的な住生活経験 (不明を除く n = 330 について)

表3 伝統的な住生活の経験数によるグループ分け

人 (%)

調査年 (学年)	住生活経験				
	低位群 (経験数0~5)	中位群 (経験数6~8)	高位群 (経験数9~14)	不明	総計
2019年調査 (1年生)	30 (26.1)	37 (32.2)	43 (37.4)	5 (4.3)	115 (100.0)
2019年調査 (2年生)	30 (27.0)	40 (36.0)	39 (35.1)	2 (1.8)	111 (100.0)
2020年調査 (新1年生)	32 (27.1)	43 (36.4)	42 (35.6)	1 (0.8)	118 (100.0)
総計	92 (26.7)	120 (34.9)	124 (36.0)	8 (2.3)	344 (100.0)

違いが伝統的な生活経験の程度の差として表れたと推察できる。

次に住宅の築年数と住生活経験との関係を見ると、築年数が「10年未満」、「10～19年」、「20～29年」の場合は、高位群の割合が30%台であるのに対し、「30～99年」「100年以上」では高位群が5割を超え、低位群が少なくなる（図5）。築30年以上の住宅に住む生徒は伝統的な住生活を経験できている。

また、祖父母など高齢親族との同居・交流状況と住生活経験との関係を見ると、高位群の割合が高い順に「同居」（44.9%）、「別居・よく行き来する」（36.3%）、「別居・時々行き来する」（36.1%）、「別居・行き来しない」（27.3%）、「高齢親族はいない」（14.3%）となっている（図6）。祖父母と同居している家庭や別居していても交流のある家庭では、昔ながらの住生活を経験できていることから、生活経験には高齢世代からの暮らしの伝承が重要な役割を果たしていると言える。なお、別居の場合で「よく行き来する」と「時々行き来する」に大きな違いは見られない。

以上より、伝統的な住生活経験の程度に和室形態、住宅築年数、高齢親族との同居・交流状況が関係していることが示された。住宅の物理的状況に加えて家族状況が住生活文化の継承に果たしてきた役割は大きいと言える。

### 3. 日本家屋の知識

住生活文化の知識の程度を把握するために、和室の広さの表現と日本家屋に特徴的な部位の知識を調査し、住生活経験の程度との関係を考察した。

#### (1) 和室の広さの表現

我が国では、和室の広さを6畳、8畳など畳数で言い表してきた。この習慣や知識が中学生に継承されているかどうかを調査するために、「4畳半」と「6畳」の図を見せて、「部屋の広さをどのように言い表しますか」と質問した。回答者全体の正答率は「4畳半」が54.9%、「6畳」が71.2%である。「4畳半」の正答率が「6畳」より低い傾向は、筆者らがこれまで調査した大学生、高校生と同様の傾向である<sup>9) 10)</sup>。「4畳半」の設問で不正解となった回答は「わからない」「4畳」「5畳」などであり、半畳の表現を知らないために「4畳半」の正答率が「6畳」より低かったと考えられる。

また、「4畳半」と「6畳」の正答率を住生活経験の3群で比較したところ、高位群の正答率が中

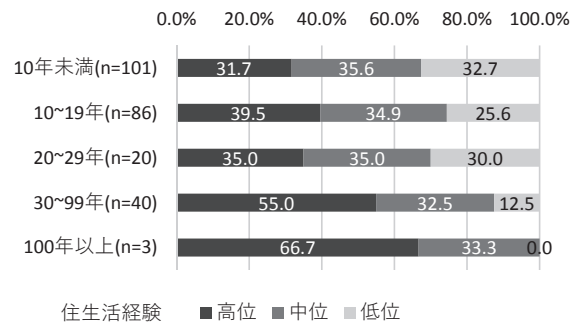


図5 住宅の築年数と伝統的な住生活経験 (不明を除く n = 250 について)

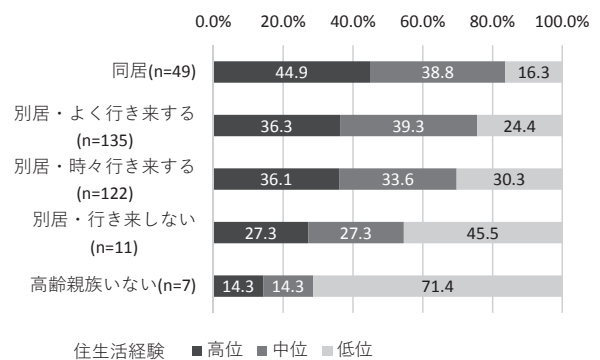


図6 祖父母との同居・交流状況と伝統的な住生活経験 (不明を除く n = 324 について)

表4 和室の広さの言い表し方の正答率 (%)

	4畳半	6畳
全体(n=344)	54.9	71.2
住生活経験 高位群(n=124)	66.9	79.8
住生活経験 中位群(n=120)	49.2	66.7
住生活経験 低位群(n=92)	44.6	65.2

位群、低位群より高かった（表4）。

#### (2) 日本家屋の部位の名称

日本家屋に特徴的な部位とその名称を知っているかどうかについては、図7に示す13の部位の名称を見て、日本家屋の室内と外観を撮影した写真の中から該当する箇所を選ぶ方法により調査した。

各部位の正答率は、正答率8割以上の「畳」「障子」「ふすま」から正答率2割以下の「棟」「欄間」「鴨居」まで部位による違いが大きい。正答率の高い部位、低い部位の傾向は、既報<sup>9) 10)</sup>の大学生、高校生の結果と類似している。また、どの部位も住生活経験高位群の正答率が高い。特

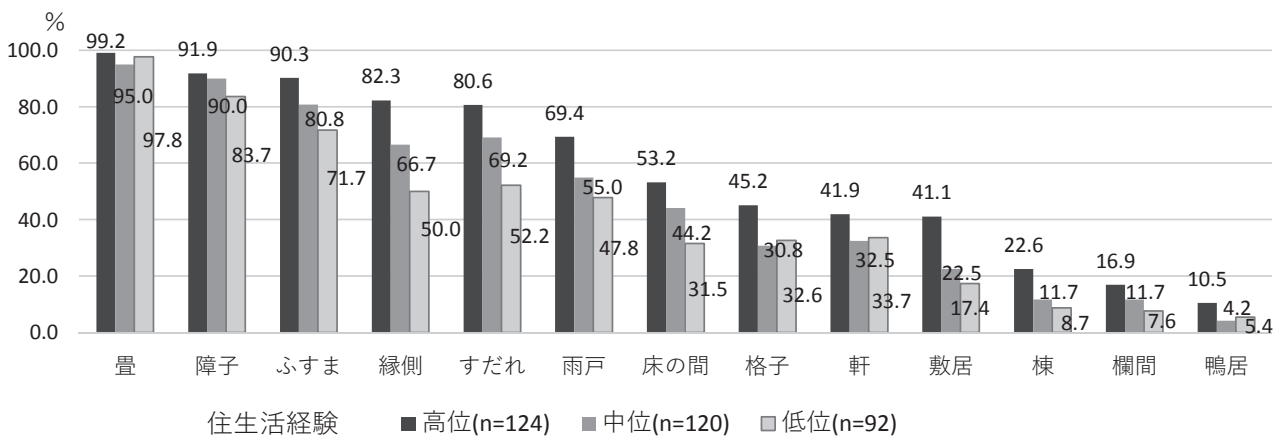


図7 日本家屋に特徴的な部位の名称の正答率 (不明を除く n = 336 について)

に高位群と低位群の差が大きい (20% 以上の差がある) のは、「縁側」「すだれ」「雨戸」「床の間」「敷居」であり、これらの部位の認識に生徒の生活経験の違いが表れている。

また、部位の名称についても一人当たりの正答数により3群 - 低位群: 正答数0~5 (124人), 中位群: 正答数6~7 (104人), 高位群: 正答数8~13 (116人) - に分け、住生活経験数の3群との関係を見た (図8)。住生活経験が高位群の生徒ほど、部位名称の正答数も多い傾向が見られる。伝統的な住空間や暮らしを経験している生徒は、日本家屋の知識もあることが示された。

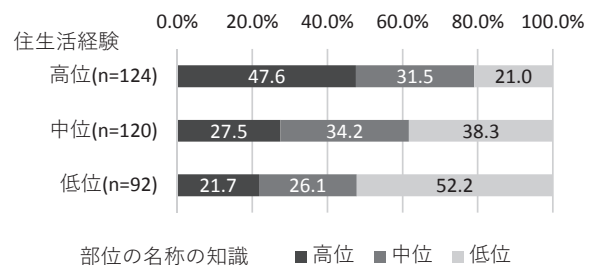


図8 伝統的な住生活経験と日本家屋の部位の名称の知識 (不明を除く n = 336 について)

#### 4. 伝統的な建物やまち並みに対する興味関心と継承意識

##### (1) 伝統文化に対する興味関心と継承意識

日本のさまざまな伝統文化の中で、生徒が興味関心を持ち、将来に残していきたいと考えているのは「和食」である (図9)。「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されて以降、「和食」の保護・継承が推進されていることが影響しているであろう。一方、伝統的な建物や歴史的なまち並みに対する興味関心は「和食」に比べて低く、「伝統的な建物に興味関心あり」は45.3%、「歴史的なまち並みに興味関心あり」は40.7%である。また、建物やまち並みを将来に残したいと思う継承意識は、興味関心より高くなるが、「伝統的な建物の継承意識あり」は65.7%、「歴史的なまち並みの継承意識あり」が62.5%である。伝統的な建物や歴史的なまち並みは、生徒にとって身近なものではなく、その良さや価値が伝わっていないと思われる。

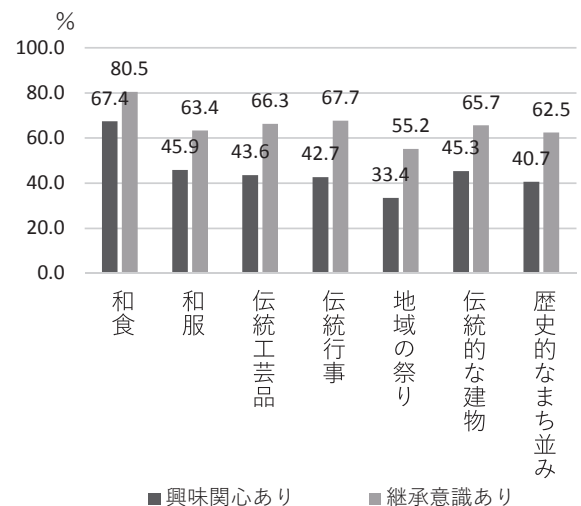


図9 伝統文化に対する興味関心と継承意識 (複数回答, n = 344)

##### (2) 興味関心、継承意識と住生活経験

興味関心と継承意識を伝統的な住生活経験の3群で比較したところ、興味関心、継承意識ともに住生活経験高位群ほど高く、低位群で低い (図10)。建築やまち並みの伝統文化に対する興味関

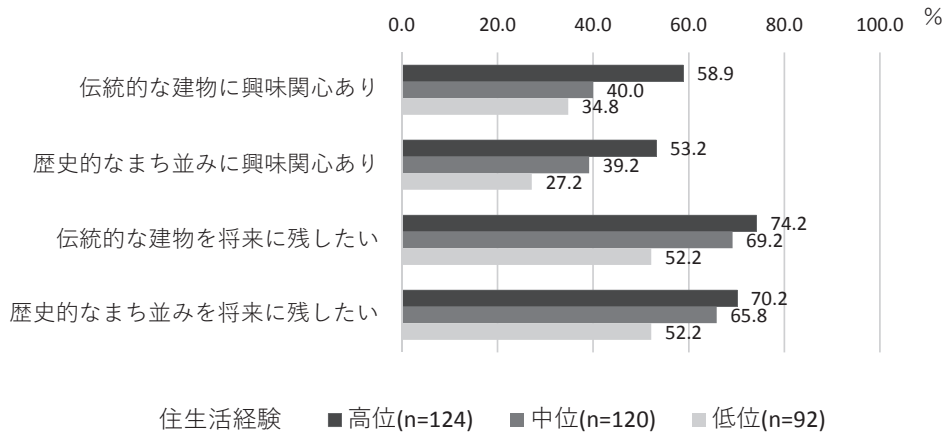


図 10 伝統的建物と歴史的まち並みに対する興味関心、継承意識と伝統的な住生活経験  
 (不明を除く n = 336 について)

心、継承意識に住生活経験の程度が関係していることが明らかとなった。家庭内で住生活文化に触れる機会が少なくなっている若い世代の生活経験の不足をいかに補うかが課題である。

#### IV. まとめ

次世代への住生活文化の継承と住教育のあり方を検討するために、福岡県内の中学生を対象に住生活文化の知識や経験の実態把握を行った。結果を以下にまとめる。

- 1) 調査対象の中学生が居住する住宅は、築 20 年未満の比較的新しい住宅であり、和室はあっても 1 室が多い。また、祖父母などの高齢親族とは行き来する関係にあるが、同居しているのは 14.5% と少ない。現時点では、自宅に続き間などの伝統的な和室がある、高齢親族と同居しているなど、家庭内で伝統的な住生活文化に触れることができる環境にある生徒がまだ残っているが、多くの生徒は、日常生活の中で住まいの伝統や文化に触れることが難しい。
- 2) 伝統的な住生活の経験については、畳に関する生活の経験率は高いが、障子・ふすま、縁側など現代の住宅からなくなりつつある部位に関する生活の経験率は低い。また住まいの維持管理については全体的に経験率が低く、維持管理の道具や掃除方法が変化していることが窺える。
- 3) 同地域の同世代の中学生であっても、伝統的な住生活経験の程度には差がある。このような住生活経験の差が何に起因するものであるかを明らかにするために、一人当たりの住生活経験数により、回答者を高位群、中位群、低位群に 3 分類した。高位群の割合が高いのは、自宅に続き間や複

数和室がある、住宅築年数が長い、祖父母等と同居している、別居していても交流がある場合である。住生活経験には、住宅の物理的な状況に加えて、高齢世代からの生活の伝承が関係している。今後の住宅と家族の変化により、家庭内での住生活文化の継承は一層難しくなると考えられる。

4) 和室の広さの言い表し方の知識については「4 畳半」の正答率が 54.9%、「6 畳」が 71.2% であり、生活経験数高位群の生徒ほど正答率が高い。中学生は畳に座ったり寝転がったりした経験があるが、畳の枚数で部屋の広さを言い表す習慣や知識には結びついていないと思われる。住生活文化の学習では、畳を単体で取り上げるだけでなく、和室の広さや空間と関連させることが必要であろう。

5) 日本家屋に特徴的な部位の名称の知識は、部位による正答率の差が大きい。住生活経験数の 3 群で比較すると高位群ほど正答率が高いことから、伝統的な住空間や暮らしを経験している生徒は日本家屋の知識もあると言える。高位群と低位群とで、特に正答率の差が大きかったのは、「縁側」「すだれ」「雨戸」「床の間」「敷居」であり、これらの認識に生活経験の違いが表れている。現在の住宅からなくなりつつある、これらの部位とそれに関する暮らしを教材化していくことが必要である。

6) 伝統的な建物および歴史的なまち並みに対するに興味関心、継承意識に住生活経験の程度が関係していることが明らかとなった。生徒の住生活経験の不足をいかに補うか、また住生活経験に代わる代替の方法で意識を高めることができるのか等について検討が必要である。

以上、本研究は、一地域の中学生を対象とした調査に基づくものであり地域性を考慮する必要があるが、中学生の住生活文化の知識と経験の実態、およびそれらに関する住宅や家族状況など中学生を取り巻く環境の実態を明らかにすることができた。今後は、得られた知見を住教育の検討につなげていきたい。また、他地域での調査や高齢世代の調査などを加え、住生活文化の継承実態について全体像を把握することも課題である。

### 謝辞

アンケート調査に協力して下さった中学校の皆さまに、記して深謝の意を表します。

### 引用文献

- 1) 国土交通省「和の住まいの推進」  
[https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku\\_house\\_tk4\\_000078.html](https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk4_000078.html)  
(参照 2023 年 9 月 17 日)
- 2) 文化庁「無形文化遺産」  
[https://bunka.nii.ac.jp/special\\_content/ilink4](https://bunka.nii.ac.jp/special_content/ilink4)  
(参照 2023 年 9 月 17 日)
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 家庭編」
- 4) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 技術・家庭編」
- 5) 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 家庭編」
- 6) 奥田千尋, 碓田智子「日本の住文化を伝えるための住教育に関する研究 小学生のいる家庭における伝統的住文化の継承実態と保護者の住意識」平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会, pp.701-704, 2010 年 6 月
- 7) 妹尾理子「日本の伝統的住まい・建築に関する若者の理解の現状と課題－住教育の充実に向けた基礎調査として－」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）, 13021, pp.41-42, 2015 年 9 月
- 8) 正岡さちほか「小学生の和室に対する意識をふまえた住生活文化教育のあり方」鳥根大学教育学部紀要（教育科学）第 55 巻, pp.43-51, 2022 年 2 月
- 9) 鈴木佐代, 有友里沙, 古田慧, 豊増美喜「住生活文化の継承と住教育に関する研究（第 5 報）教員養成大学学生の住生活文化の経験と継承意識」日本家政学会第 73 回大会研究発表要旨集, p.70, 2021 年
- 10) 鈴木佐代, 有友里沙, 古田慧, 豊増美喜「住生活文化の継承と住教育に関する研究（第 7 報）高校生の住生活文化の知識と経験」日本家政学会第 75 回大会研究発表要旨集, p.66, 2023 年